

泉都に芸術の花が咲く



発行 別府鶴見丘高校
新聞部 責任者 悠貴代
新責任 鹿住 和
責任 鹿住 和
責任 鹿住 和
責任 鹿住 和

障がい持ちながら 絵手紙つくる

「毎日少しずつ 頑張ることが大切」

夢を追い続けるアーティスト原野さん

九月中旬、別府市内の不老泉にて、絵手紙作家で障がい者アーティストの原野彰子さんが私たちの取材に応じてくれた。原野さんは、生まれつきの脳性麻痺で、歩いたことがない。

そのような原野さんが、絵手紙に出会ったのは30歳の頃、リハビリセンターの職員に薦められて描き始めた。最初は絵が嫌いだったが、努力し、その味のある絵が世間に認められた。



→絵手紙について、熱心に語る原野さん

原野さんの絵手紙も出典される国民文化祭。大分県各地をテーマごとに区別し、区域ごとに全164種類の催しが行われる。大分での開催は20年ぶり、今年は大分では初の試みとなる。障害者への理解を深めるための、障害者芸術祭も同時に行われる。今回、大分では「おおいた大茶会」という名前で10月6日から11月25日まで開催される。その中でも、別府市が特に力を入れているのが、「アニッシュ・カプーアIN別府」

別府公園に異空間

その後展示会を開く

だ。「BEPPOP PROJECT」主催の芸術祭との特別連携事業で開催される。アニッシュ・カプーアは現代アートの巨匠と呼ばれる程の腕を持つ芸術家だ。今回は別府のために、世界初公開の作品を含む計3作品を、別府公園内で展示する。そのうちのひとつ、世界初公開の「Logvoid the pavilio (仮)」は、彼が独占権を持つ「世界一黒い塗料」をふんだんに使い、6メートル以上もある空間を、ブラックホールのように仕上げて



→原野さんの作った絵手紙

ることを1年間続けた。どんなに大きな夢でも、毎日少しずつ頑張ることが大切」と語ってくれた。また、私たち高校生へのメッセージとして「自分らしさ、自分の特技を大切にしたい。夢を持って欲しい」と話してくれた。これからの自分の夢については「大分県全部の小学校に行きたい。今まで小規模校にしか行けなかったが、これからは大規模校にも行きたい」と言ってくれた。今回の国民文化祭で原野さんは、別府市の盛り上げ隊として活動している。

「BEPPOP PROJECT」の月田さんは「国民文化祭が開催されている51日で作

清島アパートへ

ARTIST FORUM

写真に写る昔ながらの建築が魅力的なここは、清島アパート。以前は社員寮だったこのアパートは、2009年の「別府現代芸術フェスティバル2009」混浴温泉世界」の一部会場として利用されたことをきっかけに、アーティストを対象としたアパートとなった。毎年9〜10人の

読者へのメッセージ

私は、今回この文化プログラムに参加して、様々な体験をし、様々な知識を得た。そのような体験をして、私が読者に一番伝えたいことができた。それは、「別府にはいろいろな人がいる」ということだ。人の数だけの個性があり、物語がある。そう私は感じた。今回取材でお世話になった、原野さんや「BEPPOP PROJECT」の人たち、清島アパートの方たちは、みんなそれぞれ目指すものを持っていて、そして、自分なりの考えがあった。そのような人たちが「みんな」が住む街。それが別府なのだと思います。国民文化祭で、大勢の人が市外から別府を訪問するだろう。そのような人々たちには、「別府にいろいろな人たちが」にも注目してもらいたい。(鹿住 悠貴)

私が、今回の取材を通じて思ったことは、「リアル」のすごさだ。様々な作品を「リアル」で見ること。制作過程の「リアル」な話を聞くこと。制作者の心の中や生き様を「リアル」に聞くこと。文字や画面を通じて見聞きすることの、何万倍もの価値があると思う。取材の中でも、特にリアルを感じたのが原野さんのお話だ。障がいを持っていて、暗く、マイナスに感じさせられることもなく、終始ハキハキと笑顔で話してくださった。そんな原野さんを見て、勉強や部活を頑張ろうと思ったと共に、いろいろなことに挑戦してみようと思えた。別府のいろいろな所に行ったことで、私の知らない別府の魅力を見つけられ、さらに別府が好きになった。この新聞の読者の皆さんにも、ぜひ国民文化祭に参加して、自分の街の魅力に気づいて欲しい。(笠置和代)



→清島アパート入口側

研究なども行っている。他にも多くのアーティストの方が住んでいる。ここ清島アパート。外観だけでなく、アパート内にも居心地の良い雰囲気が漂っている。見学も行って、ぜひ足を運んでみて欲しい。